

伊吹山の山岳信仰

出雲井

—大原と郷里を潤す用水—

伊吹山の神格そのままを祀る伊夫岐神社付近で、姉川から取水する「出雲井」は、大原郷（大原学区と春照・高番・相撲庭）の16ヶ村の水田を灌漑する用水で、横山丘陵先端の龍ヶ鼻でさらに郷里井となって旧長浜市北東部の郷里庄16ヶ村の水田を灌漑します。さらに、その落ち水の行方などを加えると、旧長浜市域の大半がその影響下にあるという、巨大な灌漑面積を有する用水です。

出雲井開削の由来には二つの話が伝えられています。ひとつは古代の伝承で、白雉元年(650)、古くから大原野とよばれた肥沃な原野を、出雲(島根県)の国人大助が多くの人夫を連れてきて開拓し、伊吹山の下に井堰を造り、溝を掘って開拓地を灌漑しました。白雉3年5月1日(新暦)に完成し、出雲の人が開いたことから出雲井と名づけられました。また、間田の小岡に開拓神・素盞鳴尊を祀る大梵天宮(現在の岡神社)を建てて、五穀豊穰を祈願しました。

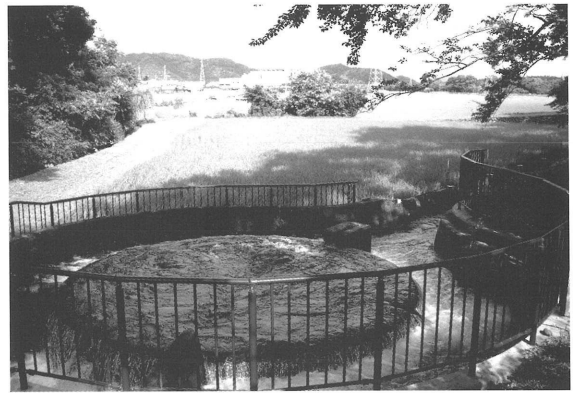
この岡神社の周辺は、米原市内の古墳の密集地のひとつです。境内からは、昭和59年に石灰岩で構築された横穴式石室を持つ高岡塚古墳が発掘されています。このほか、唐古塚古墳・番庄塚古墳・間田廃社古墳・日御子社古墳(間田)や、皇后塚古墳・皇后塚東古墳(井之口)など、6世紀後半から7世紀初頭の古墳群が、伊吹山から延びる低丘陵上に分布しています。これらの古墳群は出雲井開削に先駆けて、大原野を開いた有力者がいたことを物語るもので、岡神社背後に広がる湧水地の長曾・白谷が重要な役割を果たしていたと考えられます。



小田分水

中世の開削由来

出雲井開削には、もうひとつの話があります。宝治2年(1248)、佐々木氏からわかれた大原氏の始祖重綱が、宇治川の戦いの功績によって大原郷八千石の所領を賜り、馬淵五郎左衛門尉の援助で本市場に館を構えます。その堀の水を引く際に、伊吹村(伊吹)の出雲喜兵衛が、姉川の川筋を見立てて、「姉川の大富尻より二、三町ほど下の釜ヶ淵の少し上流に井堰を設けると、大原の城内も百姓も安心して生活できる」(『大原之郷由来出雲井根元記』)と引水したことに始まります。出雲喜兵衛は、姉川一之井の権利を与えられ、用水は出雲井と名づけられました。



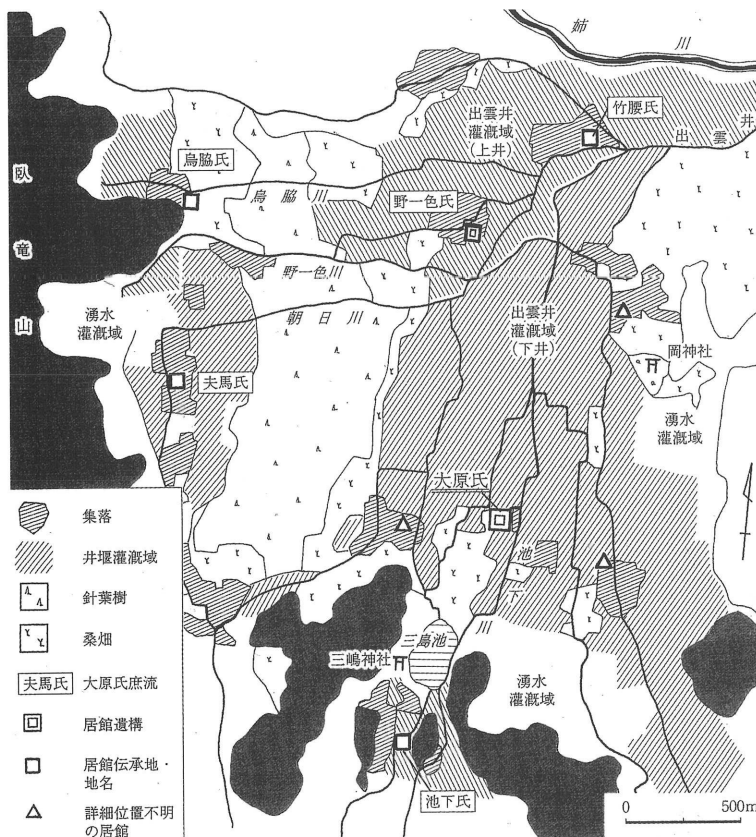
井之口円形分水



小田城跡(竹腰氏館跡)



五水分水(間田)



出雲井灌漑範囲と居館主導型集村
(佐野静代『中近世の村落と水辺の環境史』より)



大原氏館跡(本市場)

大原氏は、大原荘を灌漑する出雲井の水利を開発し、さらに、出雲井を自らの本市場の館の水堀に引き込むことで、用水を掌握する権利をもつ支配者となりました。さらに、出雲井は、大原荘内で分水を繰り返して、各地に野一色氏・夫馬氏・鳥脇氏・池下氏・竹腰氏(小田)など、大原氏の分家や一族が居館を構え、水堀を巡らせています。水利開発と用水管理が大原荘支配の重要な根拠となり、この用水網により、大原氏の支配を強化・拡大していったのです。

出雲井

- 所在地 滋賀県米原市小田、間田他
- アクセス JR東海道本線近江長岡駅下車。バス利用。

米原市教育委員会

滋賀県米原市長岡1050-1 TEL.0749-55-4552
平成25年度 埋蔵文化財活用事業